

「ユビキタス時代の歩み方講座」第3回 2006/4月号

「所有から共有への可能性」

速水 智子

<http://www.hayamizu.jp>

みなさま、こんにちは。

情報技術（IT）の進化により社会のいたる所で私たちの常識をくつがえすようなできごとが起こり始めています。

今回はその中の一つで、コンピュータの世界の「オープン化」と言われる“新しい現象”についてお話します。

WINDOWSの独走

米国はこれまで、社会を変えるようなベンチャー起業家を数多く輩出してきました。ところで、みなさんはビル・ゲイツという名前を聞いたことがありますか？パソコンを使う人なら、誰でも知っている有名な起業家の一人です。彼はハーバード大学の学生だった1980年代始めにコンピュータのソフトウェアを作る会社（マイクロソフト社）を起しました。

コンピュータを動かすためには、このソフトウェアという、人が記述したプログラムが欠かせません。みなさんご存知のワープロ、表計算なども身近なソフトウェアの一つであり、他にもたくさんソフトウェアがコンピュータには入っています。中でもこのソフトウェアが無ければパソコンが動かないほど一番重要な役割を担っているものがオペレーティングシステムです。これを略してOS（オーエス）と呼びます。OSは野球に例えるとチームを率いる監督さんの役割のようなソフトウェアです。パソコンを使わない人でも、そのOSの商品名の「ウィンドウズ」という言葉はどこかで聞いたことがあるのではないのでしょうか。

ビル・ゲイツさんはその後「ウィンドウズ」を全世界のパソコンに標準で装備するまでに育てました。そして、IT技術、インターネットの進展と共にマイクロソフト社は巨大化していったのです。

リナックスの登場

マイクロソフトの独走体制が続く1990年代の終わりごろ、フィンランドのプログラマーによって、「リナックス」というOSが生まれました。

今回はこのリナックスと人々のかかわりがテーマです。と言うのは、このリナックスが通常ではあり得ない、不思議な展開で進化していったからです。

通常、ソフトを開発するためには、プログラムを記述していくという緻密な作業があります。これがなかなか骨の折れる作業で、完璧と思ってもバグと呼ばれるプログラムミスが出てくるもので、プログラマーたちは悩まされます。

このようにプログラムの開発は企業の組織の中でプログラマーたちが計画に沿って、機密を保持しながら製品化へと作業を進めていきます。

しかし、このリナックスというソフトウェアは全く異なる手法で世に広まりました。インターネット上にこのプログラムを公開し、誰でも無料で使うことができるようにしたのです。またプログラムの不具合や修正点があれば世界中のプログラマーが自由に改良することができました。大切なプログラムを人々に公開したことにより、世界中のプログラマーが改良を重ね、たちまちリナックスは優れたOSとして進化をとげたのです。

そして、次第に「ウィンドウズ」と共に、「リナックス」は、世界の2大勢力のOSとなりました。今やこれに係る開発者は全世界で200万人を超えられています。

このようにオープンに情報を公開して、優れたものにしていくことを「オープンソース化」と言います。

知恵の連係を可能とした環境

知恵の連係で開発されたリナックスの成功の理由の一つは、インターネットの環境が整えられてきたことが大きいと思われます。つまり人々が情報交流するためのコストが信じられないほど安価になりコミュニケーションがしやすくなったことにあります。

そもそもインターネットの無い時代では、世界中の知恵を結集することなど技術的に到底不可能なことだったわけです。

また何より驚かされることは、この開発に携わった人たちの活動には、人からの強制や報酬を得るといったこととは異なる行動原理が働いていたことです。つまり、多くの人たちが自らの意志で、無償で開発にあたったのです。

その結果マイクロソフトと言う巨大な企業に立ち向かうことのできる優れたソフトウェアが誕生しました。

所有から共有への可能性

さて、リナックスのエピソードは、情報を公開して、共有することや人々の知恵を連係し進化させることによって「そのものの価値」が高められることを私たちに示してくれました。

しかし、これまで20世紀の社会を生きてきた私たちにとって、“大切な情報を他人に無料で公開する”という考えはなかなか理解しにくいものです。これまでの社会では、情報を所有していることで優位性や価値を生み出すということが当然なことだったからです。今問題になっている著作権問題や特許なども情報の所有に基づく考え方に属するものです。

しかし、情報がいつでも誰にでも手に入りやすくなった現在では、事の本質は変わって

くるのではないのでしょうか。むしろ情報を持っていることより、その情報を高める工夫や異質なものを生み出す才能といったことのほうがより重要となっていくと思われま

情報を惜しみなく与えることで、より大きくダイナミックな流れを作りだす。目先の損得に一喜一憂していたら、決して見えてこない世界かもしれませんね。

ところで、このような新しい行動様式は、ソフトの世界だけの特別なできごとではありません。今、まさにさまざまな分野で、新しい行動が芽生えています。

例えば、ビジネスの世界ではライバル企業同士の共同開発や消費者と企業との交流で作られたモノがヒット商品となったりしています。また、NGOやNPOによる活動は共通理念に支えられ、多くの人々との連係で成果を上げています。社会起業家と呼ばれる人々による社会貢献活動は、利益優先主義とは異なる価値観のもとビジネス分野の裾野を広げています。

そこでは、小さな力が大きなうねりへと変化する可能性を見ることができます。

時間と距離を超え、共鳴する心と心をつなぐことのできる社会の到来は、今後、どのような未来を私たちにもたらすのでしょうか。

人類に与えられた千載一遇のチャンスをそろそろ、私たち一人ひとりが考えざるおえない時がやってきたのではないのでしょうか。

今回はユビキタス社会の中で「情報」というものはどんな特性を持っているのか、また私たちはどのように情報を扱ったら良いのかといったことについてのお話をいたしますね。

情報を「知」に高めるまでの知識創造の過程は、私たちの生きる姿にも通じるような、深遠な心の世界を見せてくれます。

2006/04